様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月　 ２ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０３１

研究課題名（和文）２０世紀初頭のアメリカの小学校における講堂と多目的室の出現過程に関する史的研究

研究課題名（英文）A Historical Study of the Emergence of Elementary School Auditoriums and Multi-purpose Rooms in the United States in the Early 20th Century

研究代表者
宮本　健市郎（MIYAMOTO, Kenichiro）

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：５０２２９８８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：　アメリカの小学校の校舎に講堂が設置され始めたのは19世紀末からであった。それ以前は、ほとんどの小学校は、教室がひとつしかなかった。デューイの思想に導かれた進歩主義教育者は、子どもに多様な活動を与えることと、学校と地域を結び付けることを、教育改革の主たる目的として掲げていた。講堂は、その目的を達成するための有効な手段と見なされたのである。20世紀の初頭には、人口の多い都市では、多数の教室をもつ大規模な校舎が建設され、大きな講堂が設置された。
　しかし、20世紀の半ばに、子どもの多様な学習や、集団活動への自由な参加が重視されるようになると、大規模な講堂に代わって、多目的室が利用されるようになった。

研究成果の概要（英文）：　It was not until the late 19th century that elementary school buildings in the United States began to have auditoriums. Elementary school buildings were mostly one-room schoolhouses in the 19th century. Progressive educational reformers, influenced strongly by John Dewey's educational philosophy, aimed to give school children various kinds of activities, and to connect the school and community. They regarded the auditorium as one of the most useful means for the purposes, and, especially in large cities where large school building with many classrooms became prevalent, auditoriums were usually included in school plants in the early 20th century.
　However, in the middle of the 20th century, large auditoriums in elementary schools became unpopular and were often replaced by multi-purpose rooms. The reason was that progressive educators began to consider multi-purpose rooms more suitable for children's various kinds of learning and free participation in group activities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：講堂　進歩主義教育　デューイ　多目的室　小学校　校舎　アメリカ教育史

１．研究開始当初の背景

どのような教育実践も、空間の構成（校地や校舎など）を基盤としている。校舎や教室、運動場や講堂、教室内の机や椅子や黒板、それらの有無や配置は、授業のあり方や効果を大きく決定づけている。運動場や体育館のない校舎で、体育の授業をすることは難しい。理科室や実験器具のないところで、理科の授業をするとすれば、効果は上がりにくい。教室の広さや天井の高さ、各教室や特別教室の配置、廊下なども教育実践に大きな影響を与えていると考えられる。本研究は、現実の教育空間と教育実践の関係を考察するためのひとつの試みである。教育空間の変貌過程に着目することによって、教育空間と教育実践を媒介している思想を解明することをめざす。

しかしながら、教育空間の現実構造と教育思想の関係を解明することは、いくつもの困難が伴っている。校舎の建設には費用がかかるので、現実の校舎が教育者の期待をそのまま実現しているとは考えられないこと、教育の思想が変化しても校舎がすぐに改築されるとは限らないので、校舎は思想に比べて時代遅れになりがちであること、校舎の設計が主として建築家に委ねられていること、さらに、大きな体育館がよい体育の授業を生み出すとは限らないことを考えればすぐにわかるように、校舎の構造が直ちに教育実践とは結びかないこと、などである。これらの事情は、現実の教育空間と教育思想とが乖離している可能性を示している。

本研究は、この可能性を念頭におきつつ、アメリカの進歩主義教育の思想がどのような形で校舎の構造に反映されたかを検討する。よく知られているように、19‐20 世紀転換期は子ども中心といわれる教育実践が世界的に流行したが、それを可能にするには、かつてデューイが主張したように、聴講を前提とした教室を変革することが必要であった 。すなわち、生徒が共同作業をする場所や、生徒が演劇をしたり、研究発表をしたりする場所がなければならなかった。この時期から普及し始めたいろいろな設備、例えば、図書館、体育館、作業場、特別教室、そして、講堂や多目的室などは、子どもの多様な学習と活動を保障するための重要な場所であった。ここに進歩主義教育の影響を確認することができる。

しかし、学校建築史に関する先行研究では、進歩主義教育の影響が明確に現れたのは 1940 年に完成したクロウ・アイランド小学校であることが定説になっている。クロウ・アイランド小学校は、「ほとんど完全に子どもの視点からデザインされた最初の校舎のひとつ」 であり、「(第二次世界大)戦後のインフォーマル教育の原型」 、「その後の数十年に亘って、全国のモデルになった」 と評されることもある。クロウ・アイランド小学校は、平屋建てであり、20 世紀初頭に出現した高層式でいろいろな種類の教室を備えた校舎とは大きく異なっている故に、進歩主義教育の理念を体現したものと見なされているのである。

２．研究の目的

そこで本研究で検討すべき問題は、20 世紀の初頭に、都市部で現れた大規模な「近代的校舎」は進歩主義教育思想の具体化であるとみることができるであろうかということである。子ども中心を理念とする進歩主義教育思想が普及するなかで、多くの「現代的校舎」が建設されたのは事実である 。都市部に出現した「近代的校舎」は、教室数が多く、教科別の特別教室、作業場、図書館、体育館、裁縫室、料理室、職員室、事務室、そして講堂や多目的室など、いろいろなスペースが付加されていた。しかも、防火や衛生設備の点でも急速な技術の向上があった。1906 年 4 月 18 日にサン・フランシスコで大地震と大火災があり、市街地が灰燼に帰した。1908 年 3 月 4 日には、オハイオ州ノース・コリンウッドの小学校で火災があり、教師を含めて 175 人が犠牲になった。これらの災害も防火や衛生設備をもつ現代的校舎の建設を促した 。

しかしながら、現代的校舎は、防災や衛生上の様々な技術を含んだいろいろな設備を持っているものの、その多くは、学校の管理・運営上の都合に基づいて設置されたものであり、その利用の方法は明示的な学校経営の方針によって決定されていた。教育実践についてみるならば、子どもや教師のいる場所が、その場で行なわれる教育内容と学習内容を示していた。そうであるならば、校舎の大規模化や多様化は、子どもの学習内容や活動内容を教師がいっそう強く管理することになったと見ることもできる 。この点を強調するならば、20 世紀初頭の校舎は子ども中心ではなかったと言わなければならない。

これに対して、講堂や多目的室に着目すると、事態は逆に見えてくる。それらは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて出現したが、同時期に出現した教科別特別教室、作業場、図書館、体育館、図書館などと違って、設置の理由や目的が明確ではなく、その使用法にも明確な方針があったわけではない。本研究では、この曖昧な空間・設備ともいえる講堂と多目的室に着目して、それが出現した背景とその教育的意義を考察する 。講堂での学習や活動は、教科とは違って、コース・オブ・スタディに制約されておらず、教師の裁量で子どもの多様な学習や活動が可能であり、子どもの自己表現の場所にもなる。また、講堂は校舎の中心に位置しており、コミュニティとしての学校の象徴でもあった。さらに、講堂は住民に開放する機会が多く、地域と学校とのつながりとしても機能した。これらの点で、講堂は進歩主義教育の理念を凝集していたとみることができる。実際に、校舎の中央の大きな空間を占める講堂が、「近代的」な

大規模な校舎では不可欠になったことは、進歩主義教育思想の影響があったと考えないわけにはいかない。

したがって、20 世紀初頭に出現した「近代的な校舎」が進歩主義教育とどのような関連をもっていたのかを明確にするために、本研究は講堂と多目的室に焦点を当てる。それによって、進歩主義教育の思想と校舎との関連を明確にすることができるはずである。具体的には次の三つの課題を設定する。

第一に、講堂が、いつごろ、なぜ設置されたのか、いくつかの都市を取り上げて、具体的にみていく。第二に、講堂ではどのような活動が行われていたのか、それが進歩主義養育の実践であったのか、検討する。たとえば、講堂で実施された活動の種類を分類し、誰がどのようにしてそれを決定したかを明らかにする。第三に、講堂および多目的室が進歩主義教育運動のなかでどのような機能をもっていたかを検討する。

３．研究の方法

校舎の歴史に関する研究は、これまで主として建築家が進めてきた。日本の建築家は現代的観点から、19 世紀から 20 世紀にかけての校舎をしばしば紹介しているが、かれらは、過去の「画一的な」構造として従来の校舎を批判してきた。彼らは、明治期以来の画一的で硬直化している校舎の現状を批判したうえで、実際に学校のデザインを手掛け、「子どものこころがはずむ空間」 や、「生活空間としての学校」 などを理念とした校舎を建築している。かれらの活躍は、現代の学校改革・教育改革の一環として重要な意義があるが、過去の学校建築に対しては否定的である。

しかしながら、建築家はあまり重視していないが、子ども中心を理念とする進歩主義教育思想の影響を受けた教育者の間では、「子どものこころ」や「子どもの生活空間」に配慮しようとする主張はしばしば提唱されたし、実際に 20 世紀の初頭からいろいろな新しい形の校舎が出現しつつあった。「現代的校舎」の提唱者が「子どものこころ」や子どもの「生活空間」をどのように捉えていたのかは、教育史家が解明すべき課題である。このような教育史の観点からの学校建築史の研究は、近年になっていくつか出現しつつある 。

先行研究を総合すると、19 世紀から 20 世紀までのアメリカの学校建築史は三つの段階に分けられる。第一段階は 19 世紀に出現した教会モデルの校舎(school house)の時代である。ほとんどは、教室がひとつしかない小さな学校であった。第二段階は、19 世紀末から 20 世紀初頭に出現した工場モデルの校舎(school plant)の時代である。これは多数の教室を持った高層建築であることが多かった。第三段階は、20 世紀半ば以後に出現した家庭モデルの校舎(learning environments)の時代である。子どもの生活に焦点を当てており、平屋建てのことが多く、校内と戸外との接続が容易である 。この段階説を一応の目安としながら、それぞれの段階の特徴的な校舎の構造図を収集し、そこで実践されていた教育実践を確認する。

講堂が出現したのは第二段階（19 世紀末から 20 世紀初頭）である。この時期に、校舎が複数の教室をもつようになって、生徒が教室を移動するときの廊下が必要になった。また、学級ができて、生徒全員に指示を出すときにホールや集会場が必要になった。廊下やホール等が出現したのち、それらが次第に講堂に発展していったものと思われるが、明確に証明した研究はない。いくつかの事例を見ながら、校舎の変貌過程、すなわち教場(schoolroom)分化の過程を詳細に見ていく。ホール、集会場、講堂へと形態が変わった経緯を確かめる。講堂が出現した背景には、学校をひとつの共同体と捉える思想、地域社会の中心としての学校という思想もあったと考えられる。このような教育思想の展開と、校舎の構造が変化したこととの関係を分析すれば、学校観や教育課程観の大きな転換があったことがみえてくるはずである。

４　研究成果

研究成果報告書を印刷し、図書館および研究者に配布した。それは序章と五つの章で構成されている。

序章では、研究の目的、方法、研究成果の概要を述べた。

第 1 章では、19 世紀後半から 20 世紀前半までのアメリカにおける学校建築の変貌を概観した。アメリカの小学校は、1930 年頃まで、半数以上が一教室校舎(one-room schoolhouse)であった。小学校にはひとつの教場(school room)しかなかった。19 世紀の半ばに教場が教室に分割されたとき、校舎内を移動するために廊下とホールが必要になった。ホールは、通路としての意味もあったが、同時に生徒が公開口頭試問を受けるための場所として、また、生徒の学習成果住民に発表するためにも利用された。このようなホールは教室数の多い中等学校で 19 世紀半ばに現れ、19 世紀末には大規模な初等学校にも普及した。教室の多い大規模校では、ホールが朝礼などで全校生徒が集まる場所としての機能も持ち、集会場(assembly hall)と呼ばれるようになった。集会場が、校舎のなかで独立し、ステージをもつようになったとき、講堂が成立した。ホール、集会場、講堂は明確な区別があるわけではないが、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、概ねこのような変化があったことが確認できた。講堂は地域と学校との接点であること、講堂での活動が児童の社会性の形成や学校精神の形成に貢献することなどが講堂の設置が進んだ理由であった。1930 年代になると講堂をもたない校舎が再び増え始め、規模も小さなものが増えた。児童の自己表現や多様な活動、集団活動

への自由な参加の機会を増やすことなどを重視する教育思想が広まったとき、講堂は大規模である必要はないし、講堂でなくても多目的室のほうが有効であり経済的であると、多くの建築家や教育者が考えたからである。

第 2 章では、進歩主義教育の思想と講堂普及の関係を探った。デューイの愛弟子の一人であり、連邦教育局の校舎担当専門官として活躍したアリス・バロウズの思想と活動を取り上げた。バロウズは都市化が進んで、遊び場が減少し、子育てが難しくなった都市環境の実態を詳細に調査した経験から、子どもが長時間を過ごす学校の環境を改善して、子どもの経験を豊かにしようとした。そのための具体的な方法がゲーリー・プランであった。それは、労働・学習・遊戯学校との別名が示すとおり、子どもにいろいろな経験をさせることがねらいであり、進歩主義教育の理念の実現を目指すものであった。バロウズはニューヨーク市にゲーリー・プランを導入する運動を積極的に推進したものの、選挙での市長の落選とともにその運動は頓挫した。その後、バロウズは連邦教育局の校舎担当専門官として、プラツーン学校（ゲーリー・プランを改称したもの）の普及のために活動した。ゲーリー・プランでは、子どもの様々な活動をつなぐ中心的な場所が講堂であり、講堂は同時に、学校と社会との接点でもあった。プラツーン学校は、ゲーリー・プランを実施するための環境としての校舎を意味していた。

第 3 章から第 5 章においては、20 世紀初頭から大規模な校舎の中に大規模な講堂がつくられた 1910 年代のニューヨーク市に注目して、講堂を活用した教育の理念や実際について検討した。ニューヨーク市のような大都市では、移民の激増を中心とする就学者の増加に対応するために、大規模な校舎が多く建てられた。その中にはやはり大規模な講堂が設置された。学級や学年を超えて一堂に会した大人数の児童生徒をつつがなく指導することが、緊要な課題となっていたのである。

しかし、講堂を活用した教育は（以下、講堂教育）、急場しのぎにとどまるものではなかった。進歩主義教育の理念や実践に基づき、講堂という新奇な学習空間を有効活用した学校改革が構想されたのであった。その構想の一部は、第４章において詳しくみたように、ニューヨーク市における学校改革のモデルとなったゲーリー（プラツーン）・プランの実践校において実現されていた。教室において学級単位で行われる教育を、学級や学年を超えて学校全体で行う教育によって補完して改善する試みが、一定の成果をあげていた。ただし、講堂教育は、以下に述べるように、理論的にも実践的にもいくつかの限界を抱えていた。それゆえ、構想通りに実践されたわけではなく、1910 年代から 1920 年代にかけては活用の方法に修正が加えられた。最終的には、大規模な講堂を中心とする講堂教育は衰退し、多目的室にとって代わられた。

このように、20 世紀初頭の講堂教育は、講堂という新たに出現した校舎の一角を活用して教育的環境を提供しようとした進歩主義教育の一つのユニークな取り組みであった。その反面、過大な期待が寄せられ、修正を余儀なくされる問題を潜ませた取り組みでもあった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

①佐藤　隆之「アメリカ進歩主義教育における講堂の活用の目的と実際―1910 年代のニューヨーク市を中心として―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』、査読無、第 24 号、2014 年（印刷中）。

②佐藤　隆之「20 世紀初頭のアメリカ進歩主義教育における講堂の出現と活用―集会活動に基づくカリキュラム改革―」早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究―人文科学・社会科学編―』、査読無、第 61 号、2013 年、141-154 頁。
http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/39501

③宮本　健市郎「エンゲルハートの学校建築思想：工場モデルから家庭モデルへ―子ども中心の教育空間の試み(3)―」関西学院大学『教育学論究』、査読無、第 5 号、2013 年、139-151 頁。

④宮本　健市郎「アリス・バロウズの学校建築思想：子どもの経験の豊富化―子ども中心の教育空間の試み(2)―」関西学院大学『教育学論究』、査読無、第 4 号、2012 年、89-99 頁。
http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/10301

⑤宮本　健市郎「学力テストにおける基準の変質―授業と評価の乖離―」『日本デューイ学会紀要』、査読有、第 53 号、2012 年、253-263 頁。

〔学会発表〕（計　５　件）

①宮本　健市郎「エンゲルハートの学校建築思想―工場モデルから家庭モデルへ―」、アメリカ教育学会（2013 年 9 月 28 日）、上智大学

②佐藤　隆之「アメリカ進歩主義教育における講堂を活用した集会活動―1910 年代のニューヨーク市を中心として―」、日本教育学会第 72 回大会一般研究発表（2013 年 8 月 29 日）一橋大学

③佐藤　隆之「アメリカ教育史研究における

学校改革論議―「テストと選択」に対する批判的検討に注目して―」、関東教育学会第 60 回大会シンポジウム「学校は改革でよくなったか」（2012 年 11 月 11 日）筑波大学

④宮本　健市郎「アリス・バロウズの学校建築思想―子ども中心の教育環境の発見―」、アメリカ教育学会(2012 年 10 月 13 日)。九州大学

⑤宮本　健市郎「アメリカにおける学校建築」の変遷―教師中心の教場から子ども中心の学習環境へ―」、関西学院大学教育学会(2012 年 3 月 7 日)　関西学院大学

〔その他〕
ホームページ等なし

６．研究組織
(1)研究代表者　宮本　健市郎(MIYAMOTO, Kenichiro)
　関西学院大学，教育学部・教授
　研究者番号：５０２２９８８７

(2)研究分担者　佐藤 隆之(SATO, Takayuki)
　早稲田大学，教育・総合科学学術院・教授
　研究者番号：６０２８８０３２